

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】鶴見英成

【所属】(助成決定時)東京大学総合研究博物館

【研究題目】土壌水洗によるアンデス文明形成期の食料と流通の研究:ヘケテペケ川中流域・上流域・分水嶺域の3遺跡間比較

【研究の目的】

南米大陸、今日のペルー北部において、アンデス山脈から下ってくる多くの河川の流域に、紀元前 3000 年~50 年ころにかけて、壮麗な神殿建築を中核とする定住村落が多数展開した。この時代をアンデス文明の形成期と呼ぶ。本研究では主要河川のひとつヘケテペケ川流域を対象に、このような初期の定住村落を支えた食料基盤の解明と、その地域間比較を試みた。中流域のモスキート複合、上流域のクントウル・ワシ、分水嶺をやや超えてアンデス山脈東斜面の高地に位置するワカロマという3遺跡にて、発掘調査を通じて得られた土壌サンプルを調べ、植物種子や微細な獣骨・魚骨など、そこに含まれる自然遺物を抽出して形成期の食糧資源の内容を解明することが第1の目的であった。また3遺跡は、太平洋からの遠近や標高差などにより非対称な資源を持つため、もしも地域間で食料資源が交換されていれば、その証拠が確認できるであろう。それにより流域内での物資流通を実体的に解明することを第2の目的とした。

【研究の内容・方法】

モスキート複合遺跡の土壌は助成者自身が、また他の2遺跡のものは助成者が参加する日本調査団がかつて採取した資料であり、他の調査者たちの合意のもと本計画に使用した。サンプルは採取地点・層位ごとに小分けされていたが、それぞれ内容の約半分を今回の分析に使用し、残り半分は将来の検証のために引き続き保管することにした。抽出手順であるが、たらいに水をはって土壌を少量ずつ投入し、まず浮遊物をすくって乾燥させ、植物種子等を採す。また沈殿物を別途ふるいにかけて、微細な魚骨・獣骨・貝殻等を採取した。採集物はプラ容器に分類整理し、ペルー国立トルヒーヨ大学生物考古学研究室に分析を委託、さらにその一部をスペインのマドリッド自治大学に送り、高倍率の顕微鏡写真撮影などさらなる分析を実施した。

中流域モスキート複合遺跡は、現時点までの知見によれば流域最古、土器導入以前の定住村落である。神殿建築の上で儀礼的に燃やされたとみられる厚い灰層から、トカゲや淡水性のカニなど在地の食糧資源に加えて、カタクチイワシやチリイガイなど海産資源が発見された。植物資源ではサボテン、アルガロボ、グアバなどの果実の種子に加え、トウモロコシの穂軸片が検出された。

上流域クントウル・ワシ遺跡の資料は量が少なく、また暗渠内の埋土など本来は自然遺物分析を目的とせず採取された資料が多かったが、インゲンマメやトウモロコシ、アブラナ属、タヌキマメ属やナス属の種子が検出された。

分水嶺域ワカロマ遺跡からの採取物の大多数は植物の炭化種子で、インゲンマメとトウモロコシに加え、アカシア属、ヒユ属、アブラナ属、タヌキマメ属、トケイソウ属、クサヨシ属、ナス属、カヤツリグサ科など多様な植物が確認された。とくにキヌアと見られるアカザ属の種子は、微細ゆえ報告例がきわめて少なかったものである。動物の遺存体ではとくに魚類の椎骨2点が注目される。ペルー沿岸のウツボ属のもので、表面がなかば溶融しているのは人間による摂取・消化・排泄を経たためと考えられる。

【結論・考察】

助成者はすでに中流域の別の形成期遺跡(ラス・ワカス、レチューサス)にて自然遺物を分析しているが、より古いモスキート複合遺跡の分析結果はさらなる知見をもたらした。古代アンデス社会において経済的・象徴的に重要な作物であったトウモロコシが、ヘケテペケ川流域に現れた時期は、従来の想定よりも 300~600 年ほどさかのぼる

ことになった。どの程度集約的な耕作が行われていたのか、さらなる検討が必要である。また中流域への海産資源の搬入が先土器段階までさかのぼることが分かった。さらにワカロマ遺跡のウツボ属椎骨は、形成期の北部ペルー高地における海産魚消費の証拠として、重要なデータである。ただしウツボは常食された魚とは考えにくいので、他にも多様な食用種が確認されるかどうか、今後さらに検討を続けたい。今回の分析結果を総合すると、海岸部と内陸部との資源交換が定住化の最初期より行われ、やがて高地までその流通網に含まれていく過程が、具体的に見えてきたと言えよう。